

好であった群は、PS0-1、腫瘍径が< 4cm 以下、臨床症状が無いことであり、部位、線量分割法、化学療法の併用等は現在まで予後に影響していなかった。

Ⅱ. 特 別 講 演

「炎症と胃の発癌」

東京大学大学院医学系研究科

医学部臓器病態外科学

教授 上 西 紀 夫

第 4 回新潟食道・胃癌研究会

日 時 平成 14 年 11 月 9 日 (土)
午後 3 時～
会 場 新潟ユニゾンプラザ 4F
大会議室

I. 一 般 演 題

1 当院で経験した“いわゆる”食道癌肉腫の 2 例

本田 稔・小幡 裕明・貝津 英俊
稲田 勢介・佐藤 知巳・波田野 徹
富所 隆・吉川 明・清水 大喜*
嶋村 和彦*・西村 淳*・河内 保之*
新国 恵也*・清水 武昭*・佐々木公一**
原田 篤***

長岡中央総合病院内科

同 外科*

長岡西病院外科**

県立六日町病院内科***

症例は 74 歳、46 歳の男性、主訴は両者とも嚥下困難であった。手術は開腹・右開胸食道重全摘、後縦隔挙上による胸腔内食道胃吻合術を施行し

た。いずれも主病変は肉眼的にポリープ状を示し、深達度は mp であった。病理組織学的には 2 例とも扁平上皮癌部分と肉腫様成分とからなり両者間には移行像を認めた。免疫組織染色では肉腫様成分はいずれも EMA, AE-1.3 には陰性であり、症例 1 では vimentin, desmin, HHF35 陽性、症例 2 は vimentin, desmin, α -SMA 陽性であった。自験例は免疫組織学的に肉腫様成分中に間質系マーカーを証明することができ、癌腫部との移行像と併せて“いわゆる癌肉腫”の症例であると考えられた。当院において過去 10 年間の食道癌手術症例 190 例中癌肉腫と診断された症例は当 2 例のみ (1.1%) であった。

2 進行食道癌に対する加速過分割照射の治療成績

高澤 展子・末山 博男・山崎 国男*
内藤 彰*・藤原 敬人*

県立中央病院放射線科
同 消化器内科*

【目的】進行食道癌に対する加速過分割照射の治療成績、副作用について検討した。

【対象】98 年 9 月から 2001 年 6 月までの間に当院にて AHF で治療された T2 以上の進行食道癌で根治照射を施行された 37 症例。照射方法は一回 1.5Gy の 1 日 2 回で週 5 回照射。照射線量は TD 63Gy とした。化学療法は low dose CDDP + 5FU もしくは 5FU 単独を投与した。

【結果】一次効果は 37 症例中 CR 24 例、PR 8 例、NR 5 例で奏効率 87% であった。再発は 23 例に見られた。局所再発は 7 例、遠隔転移、リンパ節転移の合計は 15 例であった。死亡例は 23 例で死因は局所 9 例、リンパ節および遠隔転移が 12 例、他病死は 2 例であった。治療関連死はなかった。2 年予測生存率は 41.4% で、50% 生存期間は 17 ヶ月であった。有害事象は急性期、晩期ともに頻度、程度ともに増加していた。遠隔転移予防目的に CR 症例 8 例に対して補助化学療法を施行したが 5 例に遠隔転移、1 例に局所再発が見られ、遠隔転移を制御し得なかった。